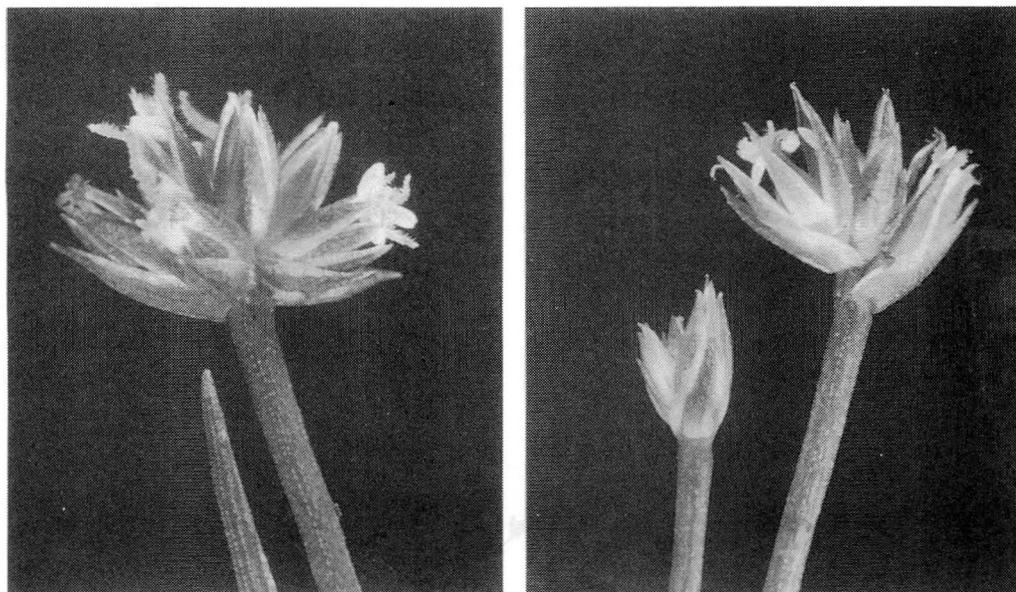

FLORA KANAGAWA

Aug. 10. 1993 No. 36

神奈川県植物誌調査会ニュース第36号

〒231 横浜市中区南仲通り 5-60 神奈川県立博物館内 神奈川県植物誌調査会
TEL 045-201-1111 内線7359・振替 横浜 3-10195



左. ニッコウコウガイゼキショウの頭花.
右. アオコウガイゼキショウの頭花.

勝山輝男: ニッコウコウガイゼキショウについて	388
木場英久: アオイチゴツナギについて	389
吉川アサ子: 地下室の思い出	389
鈴木一喜: 『スマレもタンポポも』を読んで	391
神奈川県植物誌調査会1993年度総会の報告	392
野外調査研究会ご案内	394
事務局より	394

ニッコウコウガイゼキショウについて
(勝山輝男)

ニッコウコウガイゼキショウ *Juncus nikkoensis* Satake は花序が小型で枝が斜上または直立すること、雄しべが花被片と同長なこと、さく果がより太いことなどから、アオコウガイゼキショウから区別された。しかし、最近ではアオコウガイゼキショウ *Juncus papillosus* の山地性の一型とする意見もあり、地方植物誌や図鑑類では取り扱われることが少ない。昨年、箱根お玉ヶ池でニッコウコウガイゼキショウとアオコウガイゼキショウの生品を同一場所で観察する機会を得た。表紙の写真や図に示したように、両者は相当に異なる形態的特徴があり、別種として区別するのが妥当と結論できた。詳細は神奈川自然誌資料No.14に報告した。

コウガイゼキショウの仲間のうち種子が無尾、葉が単管質のものは神奈川県にはニッコウコウガイゼキショウの他にタチコウガイゼキショウ、アオコウガイゼキショウ、ハリコ

ウガイゼキショウの4種がある。これらの検索表を示しておく。

- A.雄しべは6本(減少することもある)。さく果は鈍頭凸端で花被片より少し長い程度。
.....タチコウガイゼキショウ
- A.雄しべは3本。さく果は花被片より明かに長く2倍に達することもある。
B.雄しべは花被と同長。花序の枝は直立または斜上し、頭状小花序は3~10個。頭状小花序は4~12花よりなる。
.....ニッコウコウガイゼキショウ
- B.雄しべは花被よりやや短い。花序の枝は開出し、頭状小花序は15~数10個。頭状小花序は2~6花からなる。
.....アオコウガイゼキショウ
- B.雄しべは花被片の半長。花序の枝は開出し、3~30の頭状小花序からなる。頭状小花序は3~10花。水の多い所に生えたものは基部が倒れ、芽生することがある。
.....ハリコウガイゼキショウ



ニッコウコウガイゼキショウ

アオコウガイゼキショウ

アオイチゴツナギについて

(木場 英久)

5月5日の植物誌調査会の研究発表のときにアオイチゴツナギーイチゴツナギ群の植物の話をしました。そのときには、次のような話をしました

・神奈川県博の標本庫にあるアオイチゴツナギと同定されていた標本の多くはヤマミゾイチゴツナギであり、アオイチゴツナギは一つもなかった。

・イチゴツナギとアオイチゴツナギは下表に示したような傾向の違いがあるが、どの一つの形質を使ってもはっきりと分かれるものではない。5つの形態形質の全てを観察して、総合的に判断するしかない。

・集団全部の個体が偏った変異をもつことがあるので、集団内で正常と思える個体を採集しても、必ずしも典型的な個体であるとは限らない。

・山梨県の籠坂峠には豊富にアオイチゴツナギがあるので、神奈川にもある可能性が高い。

7月10日に勝山さんと①三国峠の林道、②三国峠～鉄砲木の頭の草地を調査したときに、アオイチゴツナギーイチゴツナギ群の植物が生えているのを見つけました。葉は枯れ、実も落ちはじめ採集に適した時期を過ぎていたのと、節の色は乾燥させたときの方がはっきりするので、そのときは確信がもてなかったのですが、②の方はアオイチゴツナギではないかという印象を受けました。

翌週の7月17日に、染色体観察用の固定道具をもって、もう一度、上記の2ヶ所と③明神峠の林道に行き標本を採集しました。押し葉標本の形態から判断すると①③の個体は節間が長く、黒い節が混ざるのがイチゴツナギであり、②の個体は、葉舌がやや長く、花梗・節間もややざらつくがアオイチゴツナギであると判断されました。

今後は、染色体数を調べ、来年は、適期に採集し、詳細な形態の観察を行いたいと考えています。

	アオイチゴツナギ	イチゴツナギ
葉舌長	4mm以下	3mm以上
花梗のざらつき	弱い	強い
節間のざらつき	弱い	強い
葉鞘長／節間長	0.7以下	0.5以上
黒い節の頻度	半分以下	半分以上
染色体数	2n=28	2n=35, 42, 49, 56
生育地	亜高山帯	丘陵地から人里

地下室の思い出

(吉川アサ子)

地下室とは？

神奈川県立博物館に展示を見学に来られる一般の方達が入り出す正面入口は、大きな石段を上がるので、通常は二階にあたる処ですが、この部位が一階なのです。そのようなわけで一番下の階は当然地下室ということに

なります。この県立博物館の全容は、外部から見ますと、それは見事なもので、これが日本で初めて日本人の手により設計から建設まで行なった洋式建造物であり、国の重要文化財にも指定されていると聞いております。従って調査会の人達は、この地下室にある植物の標本製作室に入ります。入口にある守衛所を通過してエレベーター・宿直室・事務員室が

続いて一番奥が電気機械室で、標本制作室はその一つ手前にあります。標本棚の置いてある所は、荷解き室と呼び、Uの字を直線で結び蓋になるような形で大金庫がごさいます。これは、この建物の前の持ち主である正金銀行時代の遺物で、その大金庫の扉の前には鉄格子があります。そしてその前方の空間に標本棚が並び、持ち込まれた標本等は通常この部屋で仕分け作業が行われてきました。

標本整理作業

昭和57～8年頃から地下の荷解き室に、標本棚が入りました。新聞紙に挟み、カバーに挟まれた標本は、番号順に標本棚に収められます。しかし、調査が進むと、その数が増え、たちまち棚は一杯になってしまいます。毎年いくつかの標本棚が追加されて、そのたびに中身を少しずつずらしていく作業もいたしました。上下に分かれた標本棚の上の部分は、背の高い内藤さんが受け持ち、小さな私は下の方を引き受けて、幾度かそのような作業をしてきたように覚えています。シダや樹木は楽でしたがカヤツリグサ科は大変でした。泥の付いたままの標本が多く、団子のように固まった土が頭や顔の上に落ちてくるので、鼻をかむと紙が泥で真っ黒になっていることもございました。内藤さんと二人してよく笑ったものでした。この泥だらけの標本のお陰で今では、少しでも良い標本を作ろうと心がけております。

標本を整理しながら、ときどき森先生とよくお話をしたことがありました。戦争中の話が主で、軍事教練、勤労奉仕、食糧難時代や空襲の話。同じ年の生まれの私も毎夜の空襲に逃げ回り、学校は勉強より勤労奉仕の場でもあった話。また先生は、ときどき小さな声で歌も唱われた。そのほとんどが軍歌で、そのうえ声が鈴を転がすようなというほどのぴったりの素晴らしい良いお声で、さり気なく唱っておられ、聞いているこちらはうっとり

してしまうほどでした。森先生は、「僕はネ、本当はオペラ歌手になりたかったんだよ。でもね終戦のどこを見ても焼け跡ばかりの時代に、そんな夢のようなこともできずに諦めたんだよ。それからネ、植物学者になりたかったけれど、それも無理で、それでネ、三番目に好きな教師の道を選んだわけなのさ。」とおっしゃった。時代が良ければ、今頃どこかの劇場のステージで唱われていたかも…故森茂弥先生の御冥福を心よりお祈り申し上げます。標本制作室で顕微鏡を覗いては、僅かな違いも見逃さずの研究をされておられたお姿が目浮かびます。

幽霊がでる

正金銀行時代の大金庫を見学するグループが、ときどきいらっしやいます。いろいろ解説のあと、決まって出るのが関東大震災の話であります。このあたりは一带に火災が発生しましたそうな。そして逃れて来た人達は、「この建物の中に入れてくれ。」と叫び扉にしがみついてきますが、中の人達は建物の中に火が入っては大変と、中から鍵をかけて閉めてしまったそうです。結局、外の人達は焼死し、中の人達も建物外部の温度上昇で蒸し焼き状態で死亡したそうで、見るも無惨な死体の山であったそうな。さらには、昭和20年5月29日の横浜大空襲のときも、真っ昼間の壮絶な地獄絵図であったとか解説がつけくわえられておまして、これは私自身も今で申しますと中学生くらいの年齢でしたからよく記憶しております。この地下の作業室に「幽霊が出る。」とか、奇妙な足音がするという噂もありました。……その話のせいか標本製作室でいっしょに仕事をしていたS氏は、この作業室があまり好きではなかったようです。私も博物館でお仕事をするようになって古いですから、私は知っているのです。足音の主が上の階の展示室へ見学に来ていらっしやいましたお客様の足音であるというこ

とを。

お別れパーティー

平成5年4月27日に県立博物館の標本製作室の本やパソコン、作業室や資料室の標本棚が港北区師岡町の倉庫に搬出されることになりました。そこで、標本製作室のお別れパーティーをすることになりました。私もお招きを頂き早速参上いたしました。女性は、私の外に、北川さんが出席されてパーティーに色を添えてくださいました。そして学芸部長を始め、標本製作室や作業室で仕事をした10数人の方々も出席され、パーティーは、過ぎ去った思い出話に花が咲き最高に盛り上がりました。

思えばボランティア活動以来、毎週一回、それまでに採集した植物を整理に通った人達。これを称して木曜日に顔が揃うので木曜会などと名付けられたりしました。今思うと皆さん良く頑張ったと言われました。とくに神奈川県植物誌1988が出版される間際には、毎日のように通い、本当に微力ながらお手伝いできたことを誇りとして自負しております。パーティーが盛りになったところでひと足お先に席をたち、改めてこの地下室を見渡して、もうこの部屋には、二度と入ることは無いのだと思うと、過ぎ去った10数年が走馬燈のように駆けめぐります。本当に長い間の年月を通して、いろいろとご教導下さいました諸先生に心より熱く御礼申し上げます。そしてグッとこみ上げてくるものをこらえて外へ出て扉に最敬礼をしてサヨウナラ地下室の植物標本制作室。それで家路に就きました。未だまだ筆舌に言い表すことができません。

二年後。小田原市郊外に新しい自然系博物館が完成しましたら、また、お会いしましょう。その日まで皆様もお元気で。私はまだ採集を続けて参ります。それまでサヨウナラ。

鈴木一喜さんから

『スマレもタンポポも・・・』を読んで

役員会の席上頂戴した書籍、有難う存じました。帰宅して早速に頁を繰り、始めから読み始めました。二十四頁の種子の散布法の説明には全く知らない各態様を知り、天然自然の神の美妙の技かとそれぞれの種の保存に人間の智以上に素晴らしいことがわかりました。

私の狭い体験からですが、百姓仕事をしていて、土手、草地、の草刈りをしている時、ムラサキケマンの種子の散布には、毎回新しい驚きを感じさせてくれます。鎌が当たらぬ先に莢がはじけて、種子が顔にピシピシ当たる感触を受けます。あの弾ける力、とばす力がどこに潜んでいるのか、全く微妙の仕組みです。もしムラサキケマンを自然のままの状態にしておいたら、やはり種子の散布は一定の限界がきたら自らの力で弾けるのか、など考えてみると興味は尽きません。

また三十頁の公園を自然の状態にすると森になるのか、このことについて私は畑仕事をしていますと、畑の真中に桜の苗が育っているのです。何桜か、付近にはヤマザクラ、オオシマザクラがあります。ヤマザクラならもっと殖やしたいと思ってその苗をそのままに、また数本を移植して観察していると、オオシマザクラが多いのです。ヤマザクラかどうかまだ確認はしていません。開花しなければ、いや葉の形でわかりますが、ともかく開花した木はオオシマザクラです。そこで畑の真中に一本の苗をそのままにしていたのを観察しオオシマザクラとつきとめました。どうしてこんな畑に、ヒヨドリか、ムクドリか、ヒヨドリは、桜の実のなる頃、桜の木に多くいますが、このヒヨドリが飛びながら糞をした、その中の未消化の種子が畑の中に落ちたのであり、ごくありふれた自然現象としてしまえばそれまでであります。実際に体験してみ

ますと、「公園が森になる」の活字が生き活
きして参ります。近くの河川の岸にクロガネ
モチの大樹があり、この大木を鳥糞桜とでも
呼ぶかなど、自分一人苦笑しています。啄木
歌集の中に

草に臥て おもうことなし

わが額に糞して鳥は空に遊べり

この歌をみてまた苦笑しました。

いたらぬことを書きました。本をいただいた
お礼状まで。

神奈川県植物誌調査会

1993年度総会の報告

去る6月5日(土)、横須賀市自然博物館
において1993年度の総会が開かれました。
1992年度の事業報告と決算報告がなされ、
続いて1993年度事業計画と予算案を審議
し可決しました。総会の後は小山鐵夫先生の
「スゲ属(カヤツリグサ科)の形態と分類」
の講演、大原氏(東京都立大学)「ヤブザク
ラの分類学的再検討」と木場英久氏(神奈川
県立博物館)「アオイチゴツナギについて」
の研究発表がありました。

1992年度事業報告

1992. 4.20 総会(神奈川県立博物館)
1992. 7.19 野外研究会(東丹沢広沢寺)
1992. 9. 2 フロラカナガワ34号発行
1992.10. 3 野外研究会(三浦半島)
1993. 2.26 フロラカナガワ35号発行
・標本のパソコンのデータベースへの登録作
業
・森・城川・高橋・勝山氏による雑草の本出
版
・靱山泰一先生米寿記念著書目録・論文集の
編集(継続中)

1993年度運営体制

植物誌調査会役員(1993.6.5)

顧問 靱山泰一

代表 村上司朗

運営委員 秋山 守、内田藤吉、大場達之、
大森雄治、小崎昭則、小原 敬、
笠原基知治、勝山輝男、城川四郎、
小林純子、鈴木一喜、諏訪哲夫、
高橋秀男、西山清治、根本 平、
長谷川義人、浜口哲一、早川亮太、

守矢淳一，山本 明
事務局 勝山輝男，木場英久

1993年度事業計画

フロラカナガワの発行（年2回，7月，1月頃を予定）

植物誌の頒布

野外研究会・講演会

榎山泰一先生米寿記念著書目録・論文集の出版

丹沢大山自然環境調査（植物相）への参加
神奈川県版レッドデータブック作成への協力
神奈川県立博物館の情報システムへの協力
地域フロラの刊行（まとまったものがあれば）

えます。

調査期間 野外調査 平成5年度～7年度
解析，分析，報告書作成 平成8年度

調査内容 丹沢大山地域内に生育する維管束植物の種類構成を明らかにする。

- ・神奈川県植物1988のデータベース等を利用してリストを作成する。
- ・過去に記録があって，植物誌1988で採集されなかったものについて，現地調査，標本調査，文献調査を行なう。
- ・神奈川県植物誌1988の際，十分に歩かれていない地域（世附川流域，玄倉川源流域など）を重点的に調査。

丹沢の調査チームは次の方々です。

リーダー 勝山輝男

調査員 高橋秀男，城川四郎，小崎昭則，
秋山 守，田中徳久，長谷川義人，山本 明，
田中一雄，宮崎 卓，増子忠治，木場英久，
大森雄治，北川淑子，佐々木あや子，
佐藤恭子，酒井藤夫，浜中義治，早川亮太，
林 辰雄，森川美也子，西山清治

神奈川県レッドデータ生物調査への協力

神奈川県立博物館・自然系の開設準備室が
神奈川県内の絶滅または絶滅が危惧される生物
（維管束植物，昆虫，鳥類ほ乳類）の調査を
平成4年度より3か年計画ではじめました。
昨年度は文献調査を行ない対象種の絞り込み
を行ないました。今後，科博や東大の標本調
査，過去の生育地の現況などを調査する予定
になっています。植物誌調査会でもデータの
提供など協力することになりました。

丹沢大山自然環境調査への参加

県の自然保護課が企画した，丹沢大山自然
環境調査に調査会として参加し，植物相の調
査を担当することになりました。神奈川県植
物誌1988でも丹沢の調査は十分とはいえませ
ん。次回の植物誌改訂のためにも有意義と考

博物館情報システム構築への協力

神奈川県立博物館の再編整備に伴い，コン
ピュータを利用した情報システムの整備が計
画されています。植物誌に関連した分野とし
て次のような内容が盛り込まれています。

・ 収蔵資料管理システム・・・神奈川県博の標本のデータベース化。現在神奈川県植物誌1988の県博分の標本データ約8万5千件入力済。

・ 自然情報システム・・・UNIXワークステーションによる地図情報システム。収蔵資料管理システムの標本の位置情報（1kmメッシュ）をもとにして精度の高い分布図が作成可能。次回の植物誌の分布図作成に利用できそうです。そのためには、横須賀市博、平塚市博の植物誌標本も同じフォーマットでデータベース化する必要があります。科博や東大にある標本のデータも一部集めたいと思います（神奈川県レッドデータ生物調査で収集する予定）。

・ 展示情報システム・・・神奈川の自然電子版神奈川県植物誌に相当するものです。和名を入力すると、生態写真、分布図、種の特徴などを表示します。コンピュータを利用した検索システムも計画中です。分布図は収蔵資料管理システムや自然情報システムと連携することにより、最新のデータが表示可能となります。次回の植物誌改訂にはこのデータが利用できるかもしれません。CD-ROM版の植物誌も考えられます。

野外調査研究会ご案内

雨山峠方面

①1993年10月16日（土）

②玄倉-雨山峠-寄<やどりぎ>（徒歩6～7時間）

③小田急 新松田駅前

富士急バス 西丹沢・玄倉方面行き

新松田発8:25に乗車

玄倉9:06到着予定

*この時間帯にはこのバス1本しかありませんから、乗り遅れないこと。

*帰路は寄からバスで新松田へ

④弁当・水筒・雨具、忘れないこと

⑤雨天中止

行事担当 城川 四郎 TEL 0463-88-2085

事務局より

県立博物館の一時閉鎖にともない、調査会の事務局は県立博物館の建物から神奈川県住宅供給公社ビルの7Fにある神奈川県教育委員会博物館開設準備室に移転しました。郵便物はこれまでどおり県立博物館あてで届きます。電話は045-201-1111 内線 7359 です。

県立博物館の標本は港北区師岡町にある日本通運新横浜支店の定温倉庫に預けてありますが、閲覧は可能です。倉庫内に事務室も借りられたので、標本のパソコンへの登録作業や標本貼りなどの作業はこれまでどおり続いています。標本を利用される方は事務局の勝山または木場まで連絡ください。

編集後記

フロラカナガワの版下作りはこれまで、植物誌1988の版下作りで活躍した活字プリンターで行なってきました。博物館の標本製作室も手狭でしたが、博物館開設準備室はさらに狭く、活字プリンターのような場所をとる機械は置くことができなくなりました。そこで今回から編集作業はパソコンのワープロで作成しレーザープリンターで打ち出すことにしました。レーザープリンターの性能が良くなり、文字のギザギザはなくなりましたが、できあがった版下をルーペで拡大して見ると、線の縁が多少波うっていたり、炭素の粒子がにじんでいたりします。やはり活字のようなシャープな文字にはかなわないようです。

次号は1月を予定しています。12月末までに原稿をお送りください。

（編集担当、木場英久、勝山輝男）